令和二年度

勿来高だより

第三号　令和二年水無月二十六日発行

体験？いや、体感です

本校では、家庭科の科目の一つとして「生活と福祉」という授業があります。この日は、写真の体験グラスを使用して、白内障の体験をしました。このグラスを装着すると、画像のように周囲の視野が削られた上に、見える部分も白く霞んでしまいます。印刷ではわかりにくいかもしれません。本校ホームページから本紙をご覧のかたは、画像の真ん中に人が立って、左手に非常口のサインを持っている画像なのですが、わかりますか？

さらに授業の中では、見え方の確認だけでなく、実際の生活にどのような支障が出てくるのかも体験します。調味料ボックスからこしょうの瓶を選ぼうとしているのですが、これがなかなか難しい。顔を近づけてじっと見ないと判別できません。

白内障のかたの困り感を体験により体感する。私が見えている範囲が同じように見えているわけではない。私にはっきり見えているものが、同じようにはっきり見えるわけではない。そういうことを知らずに、父母に「そこにあるでしょ」「早く選びなよ」と言ってしまったことが今まで何度あったことか。

反省しきりの体感授業でした。

検査を受けました

校長が服装検査で指導でも受けたのか？と思ったかた、かなり違います。学校が検査を受けるのです。

学校には法律や条令等で定められた様々な帳簿（公簿）があります。学校の安全安心に関わるものや生徒の学習記録に関わるものなど、写真のように机にずらっと並ぶほどあるのです。

学校が受ける検査というのは、公簿が正しく備えられているか、授業はきちんと行われているかを、教育委員会の専門の担当者がやってきて確認をすることなのです。

あまり知られていませんが、たぶん読者のみなさん誰もが学校の公簿を作成しています。週番になったときに書いた「学級日誌」「ホームルーム日誌」と呼ばれるもの、あれも公簿です。そういえば学生だった頃、日誌をふざけて書いたら先生に烈火のごと

く怒られた（友人がいた）ことを思い出しました。あれはとても検査に耐えられる代物ではなかった（代理で反省）。

授業は参観しての検査です。授業については、生徒一人一人をよく把握して、丁寧に授業を展開している点等について、大変よい評価を受けました。

「きまり」からはずれたりしたところは指導されて正し、よくできているところは褒められてもっとよくしようと思う。

あれ？なんだか指導を受けた生徒と同じですね。

連載小説　自動ドア　第一回

仙田ノモ

昨日、突然A先生から連絡があったよ。唐突に、「学校で、怖い体験したって以前に言ってましたよね」って、電話で言うんだ。いったい何のことかと思ったよ。

詳しく話を聞いてみると、みんなが村上春樹の「鏡」を国語で勉強してるって言うんだ。そこで、ピンときたね。「鏡」も学校を舞台にした何となく薄気味悪い小説だ。それで、私がみんなの学校で教頭をしていたときの怖い体験を、以前に話していたことをA先生が思い出したんだね。

結局、お願いされて、こうしてその体験を話すんだけど、ほんとはさ、あんまり話したくないんだよね。だって、考えてもみなよ。村上春樹の「鏡」は小説だろ。でも、私の体験は実際にあったことだよ。

それもさ、今みんなが勉強している学校でね。ほんと、しばらく考えたんだ、話すべきかなって。

でもね、まあ、これから話すことは、君たちが下校した後の夜の話だし、昼間、学校にいる君たちには直接関係はないしね。君たちにとっては、もしかしたらA先生のほうが、ずっとずっと怖いかもしれないね。

とにかく、昼間に怖い体験をしたことは誓ってないから、君たちは安心していいよ。だから、話してみることにする。（続く）

校長のつぶやき

「勿来高だより」三号をお届けします。私の家庭科は小学生まででした。たしか、ほうれん草のバター炒めを作りました（おいしかった記憶あり）。中学校では男子は「技術」で椅子を作りましたが、家庭の授業はなかったと記憶しています。

今回、家庭科が「生涯発達」、平たく言うと人間の変わり続ける一生すべてを相手にした学問だと改めて認識しました。

生徒一人一人を取り巻く「今」は違うので、体感の意味も違ってきます。高齢の父母がいる私とは大きく違います。けれど、今回の体験が体感となって記憶の奥底に種となって残れば、きっと千変万化する一生のどこかで芽吹く。そう信じることができる授業でした。

さて、小説に登場する村上春樹の「鏡」は、「カンガルー日和（講談社文庫）」所収の短編小説です。連載するのは、授業で小説の構成や表現を考えるために、「鏡」を参考に作った習作です。一度、「鏡」をお読みいただくと、面白さ倍増です。

（本紙中のイラストは「いらすとや」WEBよりお借りしています。）